

1.はじめに

沼津市民訪問団（10名）に参加して7月20日から30日にかけてミシガン州、カラマズー市に出かけました。今年で姉妹都市提携して47年になります。夏時間の米国で、高緯度に位置するカラマズー市では夜9時半まで明るく、連日盛りだくさんの公式行事とホストファミリーとの交流で夜10時の開放はざらで、睡眠時間(平均5、6時間)を優先したために予定した絵葉書のエアメールをついに断念しました。体験型（リヤマの餌やり、紙作り、乗馬、養蜂、等々）の行事や州都ランシング（Lansing）の議事堂の見学などがあって予想より変化に富み満足しました。また、ホストファミリー・プログラムでは7月24日(土)にはシカゴ見物、25日(日)はGull Lakeでクルージングを楽しみました。全体としては忙しい日程でしたが、カラマズー委員会のメンバー、スタッフ、ホストファミリー、イベントの受け入れ先などの人達との交流があって、普通の観光旅行では味わえない充実した、思い出深い姉妹都市の滞在でした。私の日常の生活のひと月分を10日間に圧縮したようなカラマズー滞在の生活は密度の高いものであった感じがします。

今回の機会を与えて頂き、支援をして頂いたカラマズー委員会、ホストファミリー、行事受け入れ先など関係者の皆様に感謝を申し上げる次第です。

体験や感想を公式行事とホームステイ、その他に分けていくつの事例を報告します。

2.公式行事での体験と感想

・ **Heritage Guitar Factory** 有名なGIBSONのブランド名で知られるHeritage Guitar Factoryでは、ギターの製造工程を見学した。シンプルな機械と道具を使って職人芸で高級なギターを手作りしている。米国内はもとより、外国のミュージシャンからの注文が多い。2階のリハーサル室で地元のアマチュアバンド「Kalamazoo Academy of Lock」の演奏を聞いた。会社が地元のバンドに部屋を提供し支援している。これは立派な社会貢献事業である。昔、ビートルズがおしのびでここへ現れたと言う。ここはギターリストやギターコレクターには聖地のようだ。

・ ウェスタン・ミシガン大学（WMU）を見学

ソーラカー見学後、クラフト・ペーパーの製作体験。木材チップ、薬剤をタンクに入れて加圧、加熱して2時間保持したパルプ原液をプレス加工、ロール加工してクラフト紙を作った。工程は単純で紙の製造原理が分かりやすい。この後、オフセット印刷機を見学。カラマズーは昔、ペーパーミルがいくつもあって製紙業が盛んであったことを物語っているようだ。



・ **Tillers International** で見学と体験 ここでは、アフリカ、中央アメリカなどの発展途

上国から伝統農業や伝統的職人技術（鍛冶屋、樽作りなど）の習得に青年たちがやってくる。①この施設の目的は伝統技術を保護すること。②経済的に発展の遅れた国に対して伝統技術を普及させて、生活を豊かにすることに貢献することであると説明があった。鍛冶屋（Blacksmith Shop）ではふいごと石炭を使う簡単な炉で鉄塊を温めてから、金床、ハンマー、ツカミで器用に吊り具を作って見せた。樽作りも見た。一頭が 1500 ポンドもある大きな 2 頭の雄牛を使ったスキでエチオピアとジョージア州の青年が畑を耕していた。この青年たちの指導で仲間の実地体験を観察したが、まさに畑の道草を食う気ままな牛をまっすぐ進める作業は容易ではない。アメリカのような近代技術の先端に行く国でこんな前近代的な伝統技術のトレーニングセンターがあるのはおもしろいコントラストである。

・リヤマの餌やり、乗馬体験

リヤマは、実に人なつこい、やさしい動物だ。リヤマに近づくのも餌をやるのも初めである。色は薄茶色と白黒のぶちの 2 種類。リヤマはみんなの人気者だ。



次に乗馬体験。馬に乗るのは初めてだが、手綱を持って誘導する人がいるので安心だ。降りる時は右足を持ち上げて馬の背中を越えなければならないので体が硬いシニアには大変だ。思い切り右足を持ち上げて何とか降りた。こんな体験も楽しいものだ。後で、このファームの持ち主のストリーン博士(Ph.D.)に聞いたら趣味でやっていると言う。こんなスケールの大きな趣味があるのかなと思う。

・パスティ作り 聖カトリック教会の大きなマリアン・ホールのレストランで料理、クッキーとケーキのデコレーションのデモと体験があった。まずは、レストラン”Oakwood Bistro”のシェフからパスティ (pasty) の説明があった。「パスティはアッパー・ミシガンでは、マクドナルドのようにとってもポピュラーである」と紹介があった。小麦粉、バター、塩、水を混ぜ、こねてから、板状でロールで引き延ばしてパスティの皮を作り、詰め物は、ステーキ、ポーク、たまねぎ、人参、かぶ、塩、こしょうが原料である。これをオープンで焼く。とてもシェフのように形よく作れないが、これがランチのメインディッシュになるのでみんなが熱心にチャレンジした。ピロシキに似た食べものの感じがした。自分の作ったパスティの見かけはよくないが、味はとてもよかった。クッキーとケーキのデコレーションは、各自のセンスで仕上がりは変化に富んでいた。いずれも初体験である。

・ Kalamazoo Valley Community College(KVCC)で水力発電の見学をした。キャンパスの前に風力発電のポールが立っており、風力発電の研究・開発が盛んなカレッジである。この風力発電装置を見て同行の仲間がトルネードがヒットしたらどうなるか聞いたら、「その時はお当て揚げである」

実技を重んじて学生が設計から、製造まで全部やるような教育の仕組みで工業専門が学校に似た感じのカレッジである。

ここで講師をしているボブ・メイリンガー会長が KVCC が開発した縦型風力タービンについて説明してくれることになった。ていると人づてに聞きました) が風力タービン(発電)について説明した時に、突然、団長の高橋裕子さんから通訳をやるように言われた。私しかエンジニアリングのバックグラウンドを持っていないためだと理解した。最初は、少し緊張したが何とかやり遂げた。なんの準備もなしに自然体でやれたのがかえってよかったような気がする。英語ができてても発電機の原理をまったく知らない人が通訳するのは難しい感じがする。ボブのスピーチを逐語的に翻訳するのではなく、スピーカーの説明全体を聞いて内容を自分なりに理解した上で要約して、聞く人が理解しやすいように自分の言葉で簡潔に説明する方法を選んだ。その方が限られた時間の中でスピーカーは多くのことを伝えることができると思う。同行の英語の先生の評価もよかったようで手助けができてよかったと思う。そんなわけで、ボブから縦型風力タービンの大きな図面を記念に特別にプレゼントしてくれました。館が風力タービンを見たのはこの時が初めてである。説明の後、質疑応答があり、風力発電に関して日本で環境問題になっている 2 点を質問した。1. 付近の住民に対する騒音問題はどうか。2. 付近住民に対する低周波振動の問題はないのか。この質問に対して答えは、「騒音が小さくなるように設計してあるので問題はない。また、付近住民がいるようなところでは建設しないから問題はない」さすがに広大なアメリカである。付近に住民がいるよう立地条件を前提にしたナンセンスのようだ。

3. ホームステイでの体験と感想

ラウール・ジョアン ヨーキムさん宅にホームステイした。ホームステイやホストのファミリーとの交流を通して、公式行事とは違ったアメリカ的なライフスタイルを経験する大変有意義な機会を与えてくれたと感じた。そこには日常的な草の根の交流があり、異文化体験のよい機会である。ベッド、風呂、食事、土足のまま、宗教(敬虔なクリスチャン)等々のライフスタイルはいろいろと異なるが、ホテルでの滞在経験があればさほど戸惑うことはないと思う。話してみると共通した価値観の方が多いことを知った。公式行事にスムーズに参加でき、ホームステイをエンジョイし、体調をくずさずに無事帰国できたのもホストファミリーの支援のお陰だと感謝しています。草の根の市民レベルの交流ができるのもホームステイのよさである。市民訪問団の参加者にとって公式行事は共通の体験であるが、ホームステイでの体験は自分だけの個人的なユニークな体験になる。

・朝の散歩 7月24日(土)、朝食後、シカゴ出発の9時までに1時間ばかり間があるので、ジョアンから朝の散歩を奨められた。JoAnn & Raoul Yochim, 住所、電話番号を書いたポスト・イットを渡されて、曲がらないようにまっすぐ歩いた方がいいとアドバイスを受けた。この辺は元幼稚園の先生らしいジョアンの気配りを感じる。すなわち、このポスト・イットをネームタグに入れて、南北に走るベンジャミン通りをまずは北を目指して歩いた。あたりはまばらに家が建つ閑静な住宅地域で、まったく閑静として、まれに車に出会うが、人に出会うことは無かった。200メートルほど行くと道は行き止まりになった。引き

返そうとしたら、道の行き止りの角の家の大きなフロント・ヤードから大型犬が飛び出して来て、向かってきたのでビックリ仰天。走って逃げるのは危険と感じて、とっさに持っていた傘でプロテクトしながらゆっくり歩いた。犬は10メートルぐらいまで接近したがそれ以上は追いかけて来なかったのでほっとした。大型犬が放し飼いにしているのは想定外だったので後でジョアンに聞いたら、電気フェンスがあるので心配はないとのことだった。それらしきものは無かったように思うが、透明なものがあるのかもしれない。

ひき帰してホストファミリーの家から、300メートルほど南に向かって歩いた。家屋敷の特徴は、家と家の間隔は30メートルかそれ以上あって、広いフロントヤードを持っており、屋敷を囲う垣根がない。国旗を掲げている家が目についた。フロントヤードにバスケットのポールを持った家はかなりあったが、北国のせいかプールをもつ家は稀であった。南面の家でも家の前に大木があって木陰を作っている景観がよく見られたが日本ではまず見かけない。フロントヤード側から見ると、建物と一体となった車が2台入る間口の広い平屋構造の家がほとんどである。バックヤード側から見れば恐らく、1階は地下または、半地下の2階建てか3階建てになっているのであろう。日本とは比較にならないほど大きい住環境である。

・シカゴ 7月24日の日曜日は、カラマズーに住む息子さんのジョセフの運転でシカゴに行った。シカゴまでは2時間半のドライブ。アップジョン社の元顧問弁護士のラウルは私と同じぐらいの年齢で昔、シカゴに7年に住んだことがあり、車中でシカゴについていろいろと解説してくれた。

シカゴ美術館に着くと、ジョセフは車でシカゴの友達のところへ出かけ、ジョアンは13時に美術館のロビーで待合せることでショッピングに出かけた。私とラウルはまず隣接のシカゴミレニアム・パークに出かけることにした。みんながそれぞれ自分の目的で自由に行動するのはいかにもアメリカ的で、合理的なふるまいだと感じた。

美術館の前の通りの向かい側はショップやオフィスの高層ビルが林立していた。この辺は恐らくダウンタウンの中心なのだろう。いつもはジョアンが面倒を見てくれるが、シカゴが初めての私が、2年前の脳梗塞の障害で車輪の着いた歩行用補助具を必要とするラウルに気遣いながら、二人で隣接のミレニアムパークまで100メートルほど歩いた。

パークでの一番の傑作はクラウド・ゲートである。重さが100トン、10×13×20メートルの鏡面仕上げのステンレス製の構造体である。鏡面にはシカゴのビルのスカイラインが写っていた。クラウン・ファンテ



ンと称する高さ 15 メートルのガラスコーティングした巨大な垂直壁面の構造物があった。その壁面に沿って水が滝のように流下している。壁面の前は、20×20 平方メートルの黒光りした黒曜石の床が敷きつめられていた。大勢の子供たちそこで水遊びしてはしゃいでいた。その他にいくつかのオブジェを見て回った。これらはいずれもシンボリックな芸術品である。

食後、ラウルはロビーのソファで休むことにしてジョアンと私は自分の好みで別々に美術品の鑑賞をした。1 階から 3 階まで山ほどある展示品の中で、特別展のヘンリ・カルティエ＝ブレッソン (Henri Cartier-Bresson, 1908- 2004) を見て回った。20 世紀を代表するフランスの写真家と言われている。歴史に残る人物や事件のリアルな写真も多かったように思う。さらに、18 世紀、19 世紀のアメリカ画家・彫刻家の作品を中心に鑑賞した。夕食はジョセフの友達が推奨のクラーク通りの”Dunlay”になった。この界限は中部時間の 10 時でもまだ明るく、東京の新宿のように若者でにぎわっていた。ジョセフが車で迎えに来てホストファミリーの家に着いたのは夜 11 時半であった。長い 1 日だったが、大都会のシカゴへ行けてよかった。

・ **Gull Lake** でクルージング 7 月 25 日(日)は、ジョアン・メイリンガーさんをお願いして Gull Lake (かもめ湖、11×5 キロメートル、水深 34 メートル) のクルージングに誘って頂くことになった。ジョアンの運転で、ボブ・メイリンガー会長夫妻、沼津市立高の梶田先生と中原先生と 5 人でカラマズーの北東およそ 18 キロメートルにあるカラマズーに向かった。ボブが友人から借りている湖畔の大きなすばらしいリゾートハウスだった。広々とした芝生のプライベート・ビーチもすばらしかった。ボブとジョアンは週に 3 度ほどここへやってくるそうだ。ボブはこの家は 100 万ドルだろうと言っていた。

豪華な邸宅の中で軽食をとると、ビーチの前の専用棧橋に係留されているモータボートに乗り込んでボブの運転で出発。息子さんのジミー (WMU 2 年生) は水上バイクでついてきた。湖上にはモータボートは多いが、ヨットは少ない。双胴船のパンテューン・ボートも走っていた。湖岸に沿ってクルージングを楽しむ。湖岸の景観はすばらしい。湖岸に点在する 100 万ドルから 200 万ドルするような豪華な邸宅を眺めていると、アメリカの豊かさの一面を垣間見る思いだ。景観のすばらしさは湖畔に商業施設がないことも大きな要因であると思う。ここで眺めていると、アメリカははっきりとした経済的な階層社会だと実感する。この景観はアメリカン・ドリームでもある。



4. その他の雑感

・ **英語について感じたこと** ジョアンから英語をどこで学んだか聞かれた。この質問に対

してどう答えていいかいつも迷う。英語を専攻したわけでもないし、英語の学校に行ったわけでもないこの質問に対しては、勉強のプロセスの説明が面倒なのでいつも独学で勉強したと簡単に答えている。今回のカラマズー滞在を通して英語によるコミュニケーションにそれほど困ることは無かった。日本にいても通用する英語は学べると感じた。

よく、「話す英語」が強調されるが、英語のリスニング能力が大事だと思う。相手の言うことが正しく分かれば、簡単な英語で答えても意思是伝わるが、相手の言っていることが分からなければ、英語が話せても答えようがないと思う。リスニングにはある程度の語彙力が重要だと思う。日本語のまったく通用しない米国で、もし英語を知らなかったら、今回の市民訪問団に参加して得られた体験、情報、交流ははるかに少ないものになったであろう。

・ ・ ボブ・バーンズに会う　　ボブは 2004 年夏から 2005 年夏にかけてカラマズーから派遣された英語の先生で沼津市内の中学で ALT をしていた。その当時の知り合いである。カラマズーに来る前に、ボブにメールを出してカラマズーのダウンタウンで会うことを約束してあった。カラマズーに着いた翌日、ジョアンにボブ・バーンズとの交信メールを示し、ボブと 7 月 26 日に会う約束を伝えてあった。ジョアンはボブを知っているので待合せ場所・時刻を電話でアレンジすると約束してくれた。翌日の 22 日に帰宅すると、ジョアンからボブが 26 日の 5 時半、ここへ車で迎えに来るとアレンジしてくれた。5 時半にボブが現れた。ダウンタウンのブロンソンホテルの中にあるイタリアンレストラン ZAZIOS で会食して、ギフトを交換した。ギフトの一つは 2010 版の沼津市の T シャツである。

ブロンソンホテル近くに道路の中央に波木がってベンチが置かれている憩いに都合のよい場所がある。車が進入禁止になっている。二人でベンチに腰掛けて話していると、いつの間にか、粗末な身なりの 40 代後半位の中東系黒人が、我々の前に現れてすごい形相で立っていた。なにやら執拗に文句を言っている。どうも俺を見て笑っただろうと言っているようだ。私はどうなるのかなと不安だった。ボブはしばらくこの男の文句を黙って聞いていたが、そのうち、ボブが財布を取り出して男に 1 ドル紙幣を 3 枚渡すと穏やかな表情になり、ボブが二言、三言説教すると、男は立ち去った。ボブは何事も無かったように落ち着いていた。この男は乞食と言うより「たかり」に近い。自分一人だったらどうなったかと想像すると、気が動転してこんな具合にはとてもさばけなかつただろうと思う。アメリカのダウンタウンには物騒な一面があると知った。



どこへ行きたいかを聞かれて、絵葉書にもなっているアルカディア・クリーク・パーク (Arcadia Creek Park) のエリアを散策し、絵葉書のロケーションで写真を撮ってもらった。それからは、からカラマズーで一番のショッピング街のカラマズー・モールを歩いて回った。私の希望で、車で鉄道のカラマズー駅に向かった。駅に着くと、一人で



駅周辺を見て回った。永井荷風が100数年前にカラマズー・カレッジに留学し、滞在中に書いた「アメリカ物語」頃のカラマズー駅と今の駅の外観はほとんど変わっていないと言われている。資料にある当時の写真と比べてなるほどそうだと思う。最後にボブが校長を務めている「カラマズー・クリスチャン・ヘリテージ・アカデミー」(Kalamazoo Heritage Academy 私立高校)に向かう途中、不覚にも、助手席で居眠りをしてしまい、キャンパス前の道路に停車して、車窓からキャンパスを眺めたら、もうホームステイ先に帰ろうと言われた。ボブの車もカーナビを装備しておらず、ベンジャミン通りに入るのに2, 3本の道をトライして手間取った感じがした。2時間半位の再会であったが、懐古談を含めてよい時間を過ごせた。奥さんのコニーに会えなかったのは残念だけど、ボブからコニーは初期の甲状腺ガンにかかって28日(明後日)に入院して手術を受けると聞いたのでコニーが来られなかったのは仕方のないことである。帰国後、ボブからメールでコニーの手術後の状況が記されていた。順調に回復しているとの知らせで大変よかったと思う。

・10年ぶりにアメリカに来てシカゴからカラマズーまでのバスの往復とカラマズー滞在中の車窓から車を観察したが、以前は大きな乗用車がけっこう走っていたが、走っている車は日本とほとんど変わらない。車のダウン・サイジング化をはっきり感じた。そして日本車が多い。不況の影響もあって、彼らもガソリン代に気を使うのだろう。車に関してはもはやアメリカは普通の国になったような気がする。

・カラマズー滞在中に何台かの乗用車に載せてもらう機会があったが、いずれもカーナビを装備していなかった。日本よりずっとカーナビの装備率が低いかもしれない。多分、道路網が整然としていて、どの道路にも名前がついており、見やすい道路標識が整備されているので、道路マップがあればどこへでも行けるからカーナビに頼らなくてもいいのだろう。

・かつて、カラマズーでは多くのペーパー・ミルが稼動していた。47年前に沼津市とカラマズー市は姉妹都市提携をしたわけだが、カラマズー市から都市提携先の調査に来た人が車窓から製紙工場(ペーパー・ミル)が林立する隣の富士市の光景を見て、ここが沼津市だと勘違いして都市提携の話が始まったとの逸話がある。カラマズーの製紙産業はとっくに衰退して無くなったので、両市の間にもうペーパー・ミルにまつわる縁は実態としてもないのだろう。

・明治の文豪永井荷風は100年余前にカラマズーのカトリック系ミッション・スクールのKalamazoo Collegeに留学し、その時のアメリカ滞在中に「アメリカ物語」を執筆して荷風は一躍有名になったと資料にある。しかし、カラマズーと永井荷風の深い縁を知る日本人はきわめて少ないだろうし、その縁を知る現地の人は皆無に近いだろう。滞在している間に現地の人からも、訪問団からもなんの話題にもならなかった。

